

新美南吉の詩集より

Nankichi×Step

南吉の詩は童話に勝るとも劣らず魅力的。
地元を中心に活躍する現代の若手作家たちと詩をコラボレーションしていきます。



熊

熊は月夜に声きいた。
どこか遠くでよんでいた。
熊はむくりと起きて来た。
檻の鉄棒ひえていた。
熊は耳をばすました。
アイヌのような声だった。
熊は故郷を思ってた。
落葉松林しやうりつしんりんを思ってた。
熊はおゝんとほえてみた。
どこか遠くで、
こだました。

おざき しょうた

イラストレーター

<http://tonton-animals.com/>

スポンジをとんとんと使って動物達を表現しています。作品中の動物達の先にいる地球の仲間達に思いを馳せてもらえるような作品制作を心がけています。

絵について

捕らえられた熊のその後を思うと、僕は寂しさを覚えました。この熊のその後に希望があるように…と願いを込めて、絵の中に檻を描く事はしませんでした。

新美南吉



にいみなんきち
(1913-1943)

大正2年7月30日、愛知県知多郡半田町(現・半田市)に生まれる。幼くして母を亡くし、養子に出されるなど寂しい子ども時代を送る。旧制半田中学校卒業後、「赤い鳥」入選を契機に北原白秋や巽聖歌の知遇を得る。昭和18年、結核のため29才で世を去る。

解説

静まり返った月夜の晩、囚われの身である熊は、どこか遠くで自分を呼ぶ声を聞く。それは懐かしいアイヌの人たちの声のようなのだ。熊は、遠い故郷を、落葉松林を思い出す。そこは、熊が生きているのにもっともふさわしい所だったのである。だが、檻の中にいる彼に何ができるだろう。彼にできることは、ただ一声「おゝん」

とほえてみることだけだった。しかし、この声は、どこか遠くで空しくこだますだけだった。生きているということ、ただそのことの寂しさや空しさを、熊の姿態を通して見事にとらえた作品だ、とっていいと思う。

解説者

前新美南吉記念館館長

矢口 栄 さん

半田市、知多市、東浦町の小学校勤務を経て'04年から'11年まで新美南吉記念館館長を勤める。著書「南吉の詩が語る世界」(一粒社出版部)「子どもたちに贈りたい詩」(教育出版センター)「新しい詩の創作指導」(共著・明治図書)ほか。